

# St. Luke's International University Repository

聖路加看護大学紀要の編集にたずさわって:昭和61年  
(1986年)～昭和63年(1988年)

|       |                                                                                                                                       |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2007-12-26<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En): 1986-1988, BULLETIN, Editing<br>作成者: 飯田, 澄美子<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/10285/270">http://hdl.handle.net/10285/270</a>                                                         |

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



# 聖路加看護大学紀要の編集にたずさわって

昭和61年（1986年）～昭和63年（1988年）

聖路加看護大学 教授 飯 田 澄美子  
(第12号～第14号紀要委員長)

私が紀要委員としての役割りをいただいたのは、昭和61年（1986年）～昭和63年（1988年）でした。昭和61年の委員長は藤枝斌教授で、原山哲、高木廣文、川口千鶴、小松浩子氏の6名でしたが、前号について、開学20周年に因んだ内容のものにしようとして第11号の計画が行われました。委員長としては、昭和62年（1987年）昭和63年（1988年）の2年間でしたが、編集委員は木村登紀子、高木廣文、伊藤和弘、小松浩子、岩沢和子氏の6名で、昭和62年（1987年）は、高木廣文氏は転勤され、あとの5名で編集をいたしました。

藤枝編集委員長からの引きつぎ事項としては、教員からの論文が集まらないために、昭和60年度が欠となり、やむなく、号数は、61年度を11号として発行した。何とか1年分をとりもどしてほしいということでした。

そこで、私共は、大学院がありながら、はずかしいことであると自覚し、何とかとりかえしをしなければならぬと考えました。そこで、事務局長へ予算のメドをつけていただき、学長へ了解をいただき、前半と後半にわけて12号と13号を計画いたしました。12号は5編、13号は8編でしたが、教員一人一人にお目にかかっては、たのみこんだり、お願いの依頼を度々行つての結果でした。当時は、論文締切りの日がきても原著論文が集まらず、論文をいただくためにたびたび時間をとって交渉し、時間と精力をつかったように思います。大学の中に、研究をするという教員の義務としての意識が少なく、主に教育の方へ関心がむけられていました。そこであらためて若い編集委員の方々と共に、聖路加看護大学紀要規則の見直し、一部改正を行い、特に文献記載の様式をつけ加えました。この時の編集会議では論文数が少ないため査読をすることができない。しかし、今後査読ができるように論文が集まり、内容の質があげられることが望ましいという話しがたびたびだされてきました。

当時の時代を看護界の研究の推移に視点をあててみますと、私共は昭和49年には、看護協会では総合学会をつくる必要があると、日本看護学会として会員を対象として発足させましたが、まだ看護の大学院もなく、研究所もなく、看護の研究者が育てられていない現実がありました。

特に原著論文を書ける人が始となく、学術雑誌の発行ができぬため、現状の学会の内容を高め、充実していく方向で、看護協会の出版会が15枚程度の準論文としての提出をもとめ（論文と講演集の中間的なもの）、学会誌に準ずるものとして発行が行われてきました。

一方、昭和56年（1981年）には看護大学協議会をバックにした日本看護科学学会が185名の会員の下に発足しました。私は理事として、学会誌をつくるための編集委員長の任をおおせつかりましたが、学会誌としてのレベルを保つために学術雑誌として査読制をとり入れることが大切と考えました。当時は、会員から論文を募集してもなかなか集まらず、集った論文を査読すると掲載できる論文が少なくなるということで発行がおくれ、昭和57年（1982年）ようやく1冊発行することができました。しばらく年1回の発行が続きました

が現在（平成5年）（1993年）では年3回の発行が可能となっています。また、昭和62年には、学会学会として認められることになりました。

時代的な背景を考えると、昭和60年代の前半、特に私が編集委員長をした時期は、研究者が育つための過渡期であったように思われます。

70周年の記念誌を作成する中で、高木廣文先生に教員活動一覧をお願いいたしましたが、（昭和39年から63年まで）丁度、61年頃から、教員の研究活動が急激にふえはじめた時期であることがわかりました。著書、訳書、論文、学会発表の中では特に学会発表数が目立って多くなっていました。現在は、私共が考えていました、査読制が取入れられ、論文数も増していることは何よりうれしいことだと思っています。

## 聖路加看護大学紀要と「看護学」の発展を祈って

聖路加看護大学 教授 木 村 登紀子  
（第15号～第18号紀要委員長）

紀要第20号の発行にあたり、私が委員長を拝命しておりました1988年4月から1992年3月当時を中心振り返ってみます。

飯田委員長のもとで、忙しくも楽しく第12号から14号の発行に携わらせていただいた後、荒井蝶子先生をはじめ合計6人のメンバーで、第15号（1989年3月刊）の発行に取り組みました。この号から、各論文に、日本語抄録と日本語および英語のキーワードを各5語付すことになりました。これは、日本科学技術情報センター（JICST）のデータ・ベースに、本学紀要の英文抄録が入力され活用されるようになったことの影響でもあります。委員会議事録によりますと、日本科学技術情報センターよりの「英文抄録の活用依頼」に対して、檜垣学部長の名前で手続きをとった旨、報告（1986年12月16日）されています。これは、「ISSN（国際標準逐次刊行物番号）の割り当て」（1983年12月8日付）と併せて、本学紀要の存在が、広く国際的な学術の世界に知られる可能性と、また、その水準が常に問われるようになったことを意味していますので、ここに謹んで記しておきます。

1988年度は、また、本学に、本学院博士後期課程の設置が認可された年でもありました。これによって、日本で初めて「看護学」が「学」として公的に認められたことになり、記念すべき重要な年でもありました。こうした背景の中で、博士後期過程の完成年次である1991年3月（第17号）の「編集後記」には、「完成年度までのこの3年間、紀要委員会でも、折々に研究と教育の殿堂に名実ともにふさわしい「聖路加看護大学紀要」にしていきたいものと、いろいろ夢を語り合って参りました。今後とも一層、皆様のめざましい学問上の成果の発表の場として、「紀要」をご活用いただけますと幸いです。」と記述されています。

当時の委員会議事録より討議事項の概要を拾いますと、毎年のように「紀要の性格」について論議されており、それとの絡みで教員業績一覧の掲載の意味とその分類の仕方、卒論や修論の題名や公開講座一覧の掲載の是非について話題になっておりました。なお、英文抄録の英文のネイティブ・チェックについては、検